

Ⅰ 次の文章を読んで、後の問い（問１～９）に答えよ。（配点 75）

商業道徳は国境を越える

ナシヨナリズム隆盛の時代には、境界を越えて活動し、境界を越えるルールにしたがっていたアクターがある。それは商人でもった。貿易や通商という活動のなかから商業道徳という一種の正義が誕生した。とくに、市場は異なる共同体同士が接触する場であり、かつ相互主観的（主観と主観をつなぐ）道徳が成立する空間であるという理由で、いつの時代でも国境を越えてゆく傾向をもつ。

たとえば、異なった正義感をもつて育ったキリスト教徒とイスラームの商人がいたとしよう。

どちらの宗教にも「交換は等価でなければならない」という道徳が存在する。そのため商人たちは、商品を受け取ったら代価を払うという最低限のルールを、もとの道徳感なく理解することができる。これは、商人たちなどの国の市場で取り引きする機会にもあてはまる。市場がどこに位置するかは儲けにとつては重要でないという意味で、彼らは国境を越える指向性をもっている。

このような人間関係には市場が絡んでいるため、ルールを遵守しつづけるという動機が生まれる。なぜなら、商業は競争ゲームであり、目先の利益のみをきいて詐欺や略奪を働くものなら、次の取引に影響が及ぶだけでなく、信用や評判を落として通い仲間やギルドから追放されるからである。ここには、正義の競争原理と呼ばれるものが作用し、その正義にはゼイサイも働いている。

もともとこのような市場は、十一、十三世紀にイタリアやフランスで国王や領主の許可を得た「市」として始まった。その萌芽的な段階では、規則の徹底や紛争の処理などは、市場を運営する人びとの手によって担われていた。しかし、のちに国家が輔弼を委ねると、国王が市場の庇護者となり、市場をめぐる契約制度、法制度が整備されてゆくのである。

国家同士の関係にも

市場に自生する正義は、やがて遠隔地貿易や重商主義時代の国家同士の関係にも拡大されてゆく。

たとえば最初は略奪と被略奪の関係にあったフランスとスペイン、イギリスとスペインにしても、ともに商業や貿易から利益を得られるという点に気づくと、緊密な交渉と相手に対するそれなりの敬意が芽ばえ、やがて略奪を働く必要も略奪を受ける心配もないうような関係にいたる。そして、君主たちは、お互いにルールをき守ることが取引の「予測可能性」を著しく高めることに気づく。

実際に、君主国同士が領土拡張によって戦争を繰り返していた十八世紀、たとえば一七〇一～一四年に戦われたスペイン継承戦争において、当事国は、併殺発と相手国との貿易が不可能になるほど都市、建物、港を破壊することはなかったといわれる。この例が示しているように、商業についての暗黙のルールが異文化間に徐々に浸透することによって、国家間の無敵状態がゆつくりと姿質してゆくのである。【１】

クロティウスはすでに『運命自由論』（一六〇九年）で、すべての民族に「他民族のもとを訪れ、彼らと取引し、商売する」権利が与えられるべきだと主張していた。運達は万人の共有物であり専有や占領が許されるべきでない、という万民法原則が浸透したのも、もろにそれが程度守られ

るようになった。戦争の勝敗負けとは別に英インディアン社会への航行や交易による利益を分け得たという動機があったからである。【2】

ドイツ出身でアメリカに渡った政治経済学者のアルバート・オットー・ハーシュマンが指摘しているように、政治経済学の先駆者であるモンテスキュー、アダム・スミス、ジェームズ・スチュアートなどは、商業が道徳心の向上に果たすこのような役割を早くから認め、それを人間関係、国家関係の穏和化に活かそうとしていた（『理念の政治経済学』）。

このような発想は、今日われわれがいうところの「経済的相互依存による平和」の原型を成している。

カントと近代コスモポリタニズム

十八世紀のドイツの啓蒙哲学者で「永遠平和のために」で著名なエマヌエル・カントもまた、貿易や商業が平和と正義をもたらすこのような効果に注目し、それを平和に活かそうとしたひとりである。

カントの目に、十八世紀の人間が同胞に対する責任や義務のみについて語れ、「人間としての義務」について思ふならことはきわめて奇妙に映った。カントによれば、人間の道徳義務は **I** という限定をもつべきではないからである。【3】

たとえば、「隣人を愛せ」という行為義務は、対象となる隣人が同胞であろうがなかろうが人間を拘束するはずである。相手が異国人であるから愛さなくともという論理は、 **II** に正当化されるものではない。カントは、状況がどうあれ、また相手が誰であれ守るべき行為規則を「定言命法」と名づけ、「もし相手が同胞だったら、義務を果たさなければならない」という「仮言（条件）命法」と区別した。

カントはまた、道徳的な国際関係の理論の構築にも取り組んだ。

十八世紀に、国際関係における平和は、当時の国際社会の無政府性、生存競争的側面を反映して「勢力均衡」という概念で語られていた。つまり **III** な平衡や釣り合いが、戦争を防ぐ有効な手立てと考えられた。そののみが、戦争に訴える機会を狭め、ひより勝ちを防ぎ、征服という野望を打ち砕くと思われたからである。

甲、カントは勢力均衡にいかなる正義も認めず、それをむしろ「不正な平和」とみた。生存競争のもとにある個々の国家を道徳的存在であるとはみなさなかつた理由は、非道徳的存在としてのヤシエリもまた、生存競争を行動原理としているからである。【4】

カントにおいて、真正に倫理的な求善とはすなわち「自己の立った基にこたへがう」状態であった。たとえば国際関係においては、諸国家が「万民法」の制定に加わり、さらにその規則にみずから服してゆく段階に人類が到達したとき、人間は真の道徳的自由を手にするのである。

現状の維持から理念の追求へ

カントの勢力均衡政治に対する批判は、まさしく普遍的正義という観点からなされていた。すなわち、勢力均衡における正義とは、いわば「勝てば官軍、負ければ賊軍」を認めるものでない。その正義には、物理的な力の優劣という領別的、偶然的な要因が反映される。しかし、偶然的要因に

左右されるものはけつして **Ⅳ** なものにはなりえない。

たとえば、ある国が勝利し、敵國の正義を盛った平和条約を締結したとしよう。その条約の正当性は、勝利すなわち我々が相手を上まわったという「現実」のみにもとづく。負けた側は、次の戦争に勝利すれば「現実」を逆返し、正義を書きなおすこともできる。**Ⅱ**、講話条約によって得られた束の間の平時を、次の戦争に負けないための軍備拡張や軍事訓練に活用する。

これに対してカントのいう道徳的正義とは、時空という偶然性を脱却したところに迫り求められねばならないものだ。つまり、人間には「汝為すべし」という行為規範が理性のなかに平等に刻みこまれており、その永遠の行為規範に合致した義務の「リト」こそが、真の正義の名に値する。

[5]

有名な『永遠平和のために』では、各国が「自由な諸國家による連合」を結成するに締結すべき基本条約の条文が提示されている。「常備軍は、時と場合により全廃されねばならぬ」(第三「予備条項」)というように、カントはそれらすべてを「理念目標」で語っていた。こうしてカントは、人間の「道徳的な意思」に大きな期待をかけ、現状の維持に固執することのない、正義にかつた国際関係をテマとして示したのである。

「前史において、これまで平和が持続したためしがない」という **Ⅴ** を眼刺を挙げて国際関係の無政府的な状況と強調する現実主義者に対し、カントは次のように語りかけている。

これまでにも一度も成功したことのない事柄でも、ただそれだけの理由で、将来も決して成功しないだろうと断言することはできない。
(篠田英義訳「理論と実践」)

この意味では、「先例のない」E.U.(欧州連合)の条約の成敗は、まさしく「国際関係は人間意思の産物」というカントの主張の正しさを裏付けているのかもしれない。

カントはまだ、「人格の尊重」を唱えた思想家としても知られている。これは、今日の人権という考えがたにも通ずることになる。

カントが戦争を避けた最大の理由のひとつが、戦争において、人格が不正に手段として取り扱われることであつた。個人が国民や軍人であるからではなく、人間であるから尊重を払われるべきだとすれば、人格に対する尊重が、そのまま国境を越えた世界的市民社会の構成原理になりうるはずである。

なるほど、カントは国家によって發展段階が異なるという現実を承知し、現下の国境が不正なかたならで引かれたものとしても、混乱を招く恐れのある国境の禁止を提案するまでにはいたらなかつた。しかし、彼が平和の第三「確定条項」として挙げた「コスモポリタン権」という考えかたには、主権を越え、リトが盛り込まれていた。

すなわち、カントによると、この地球は人類すべての共有物とみなされる。したがって、特定の領土に居場所をもつ国民がいたとしても、彼らは偶然そこに生まれることを許されたにすぎない。したがって、彼らは遠方から訪れる異邦人の領土内通行を妨けては行けないし、異邦人の訪問権が保障されなければならないというのである。

(押村高「国際正義の論理」)

問1 傍線部 a、e のカタカナを選字に直せ。カタカナの後に示した選択肢のうちから、最も適切なものを、それぞれ一つずつ選べ。ただし、a、e をそれぞれについて選定しなければ加算しない。解答書は 1、10。

a ギイサイ

ギイ ①世 ②正 ③成 ④細 ⑤政 ⑥精 ⑦製 ⑧静 ⑨整

1

サイ ①才 ②災 ③毅 ④碎 ⑤裁 ⑥歳 ⑦載 ⑧済 ⑨債

2

b キヨ

キ ①奇 ②希 ③気 ④其 ⑤奇 ⑥端 ⑦揮 ⑧貫 ⑨期

3

ヨ ①予 ②預 ③与 ④余 ⑤譽 ⑥世 ⑦節 ⑧代 ⑨四

4

c ヤシニウ

ヤ ①也 ②邪 ③野 ④夜 ⑤谷 ⑥弥 ⑦歴 ⑧家 ⑨哉

5

シニウ ①元 ②任 ③柔 ④重 ⑤從 ⑥洪 ⑦獸 ⑧凝 ⑨計

6

d リニコウ

リ ①吏 ②利 ③里 ④李 ⑤理 ⑥裏 ⑦痢 ⑧履 ⑨麗

7

コウ ①口 ②公 ③巧 ④行 ⑤申 ⑥交 ⑦考 ⑧向 ⑨広

8

e シヤナイ

シャ ①写 ②射 ③斜 ④借 ⑤敎 ⑥舎 ⑦肅 ⑧煮 ⑨選

9

ナイ ①弟 ②延 ③訂 ④程 ⑤提 ⑥俱 ⑦理 ⑧庭 ⑨抵

10

問 2 傍線部 A「商業道徳」に関する説明として不適切なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 交換は等価でなければならず、商品を受け取った代価を支払うというのは、一般的ルールである。
- ② 商業は継続することが大事なので、目先の利益のみを考慮して詐欺や略奪を働くことが信用をなくし、仲間から追放される。
- ③ 君主が商業や貿易の主権を握り、商業道徳を行き渡った国家がより発展していった。
- ④ 国家間の無政治状態が察知していくのは、商業道徳が行き渡っていったことも一因である。
- ⑤ 宗教の違いや国境を越えて、商業や貿易活動を通して、人々に経済遵守の姿勢と相手への敬意が生まれていった。

問 3 傍線部 B・C「このような」の指示内容として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。ただし、同一記号は一度しか使えない。傍線部 B の解答番号は 12、傍線部 C の解答番号は 13。

- ① 領土拡張をもたらす
- ② 商業が道徳心の向上に役立ち、人間関係、国家関係の親和化に活かされるという
- ③ 道徳心の向上という
- ④ 商業についての暗黙のルールが徐々に浸透する
- ⑤ 利益を続けて得たい

問 4 空欄 I に入る語として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 空間
- ② 支配
- ③ 先例
- ④ 世界
- ⑤ 職業

問 5 空欄 II、V に入る語として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから、一つずつ選べ。ただし、同一記号は一度しか使えない。空欄 I の解答番号は 15、空欄 II の解答番号は 16、空欄 IV の解答番号は 17、空欄 V の解答番号は 18。

- ① 物理的
- ② 計画的
- ③ 合理的
- ④ 美証的
- ⑤ 永続的

問 6 水の一文は、本文中の [1] から [5] のいずれかの位置にあつた。どの位置に入ればよいか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は [19]。

逆に言えば、人間はその尊厳を取り戻したいのであれば、生存競争を脱しなければならぬ。

- ① [1] ② [2] ③ [3] ④ [4] ⑤ [5]

問 7 傍線部 D「勝つは信軍、負ければ勝軍」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は [20]。

- ① 国の軍隊は強いらつた。
 ② 戦争には必ず勝軍と敗軍がいるといふこと。
 ③ 勝つた者が正義といふこと。
 ④ 正義を持った者が勝利するといふこと。
 ⑤ 同胞同士の間になつてしまつたこと。

問 8 空欄 [甲]・[乙] に入る語として最も適当なものを、次の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は [21]・[22]。

[甲] ① ともに ② ところで ③ すなわち ④ しかし [21]

[乙] ① そのため ② しかし ③ なるほど ④ 逆に言えば [22]

問 9 本文からうかがえるカントの功徳とは何か。適当なものを次の①～⑤のうちから、一つ選べ。ただし、解答の理由は問わない。解答番号は [23]・[24]。

- ① 国際関係における真の平和の要件として、普遍的正義の源泉を、人間の道徳的な意思に期待した。
 ② 今日の人権についての考え方に通じる人格の尊重を唱えた。
 ③ 商人の存在を肯定し、商業ルールが国際関係に平和をもたらすことを初めて認めだ。
 ④ 「国際関係は人間意思の産物」といふ主張のもとに EU (欧州連合) を成功させた。
 ⑤ 国際関係の無政府な性格を強調する現実主義者の意見が十分取り入れたうえで、理念的に道徳の正義を求めた。

II 次の文章を讀んで、後の問い(問1～8)に答へよ。(配点 75)

本居宣長の日本文化論の語り

もしもおのれの國を愛することが、おのれの國の文化を正しし姿で知ることであるとするれば、われわれは、國を愛さない國民はいまい。なぜなら、われわれほど、おのれの國の文化について基本的に誤解してゐた國民は、どこにもないであらうか。しかもこの誤解の原因は、われわれの愛國主義であつたのである。明治以来、日本の愛國主義をひとりじめしてゐたかにみえる國民、その國字こそ、文化胡謔解の張本人なのである。

國学の建設者、本居宣長はいう。いまの學者は、中國やインドのことを知つてはいるが、かゞしき日本のこと、自國のことは知らない。知らないばかりか、知らなくともとつかさぬいかのことも憶記をもつてゐる。この言葉は、ははそのまま現代の日本の學者にもあてはまる。たゞは、哲學者と稱する人、彼らはプラトンや、カントについてはよく知つてゐる。もちろん彼らの知識は、多くは西洋の學者のつけうりであり、たいていは、セカンドハンド、あるいはサードハンドの知識にすぎないけれど、プラトンやカントについては、彼らはよく知つてゐるとみすから思ひ、知らなくとはならない。しかし、空想や、道元について彼らはほとんど何も知らないし、知らなくともいつたつちがやらないと思つてゐる。私は、思惟家空想や道元が、プラトンやカントにやぐにおとるものではないと考へるものであるが、たゞなほ、ヨーロッパの哲學者にくらべても、劣つたにして、日本人としては、プラトンやカント以上に彼らの思想を知る必要があり、まだセカンドハンドではなく、ファーストハンドに知るべきであると思つてゐる。日本のことを知らなすき、それは、宣長の時代と同じく、現代においても日本知識人の大きな欠点である。この点において、われらは宣長の味方である。それゆゑわれらの立場を、ある人々は新國學派とよぶ。

たしかにわれらが新國學派とよばれるのは一理ある。けれど、われらは、宣長とは、日本文化の評論でもしうたが立脚点に立つ。宣長は考へる。日本のことを知らねばならぬ。ところが宣長は外國の教へだ。日本の教へは神の理だ。したがつて、神の理を知れ、神の理を明らかにするところによつて、日本の國を、日本の文化を知れ。神の理とは、宣長において、日本民族が、古代においてもいた、神皇正統記の宗教的儀式であつた。このような儀式の中に、宣長は一つの道徳を見だす。マコトとキョウリといふ。神。中國やインドの文化は、道徳的文化である。しかし、神理にあらわれた古代日本人の文化は道徳的文化である。善にたつて、神の道徳、そして前者の中には、ハコトとなるウソがあるが、後者の中にはおのすからなるマコトがある。ここごといふ偽りにみちた道徳的文化と、素朴なマコトにみちた美的文化、宣長はここに、日本文化の特質を見だす。

宣長のこの日本文化論には、たしかに鋭い洞察の眼が光つてゐる。日本文化の特徵を、清浄といふ価値、あるいは一種のナイーブな善直さにおいた点、彼の眼は、日本文化の本質を見破つてゐたといふべからぬ。

しかし、このような鋭い洞察にもかかわらず、彼の立場は、日本文化全体をむしろ誤解せしめるのに役に立つたといふべし。なぜか。宣長は外國のものにキョウリをつけてしまふことにより、われわれの先祖が、いかにそれらのキョウリを、日本にとり入れ、それをおのれのものにしたかと

いう文化的努力にたいする尊敬の眼を、彼のナショナリズムはすっかり奪ってしまうからである。宣長の立場に立てば、既に日本的な文化は仏教渡来以前、聖徳太子以前にあり、それ以後は

I 日本文化が不純化された時代になるといふことになる。ここに宣長の一種の復古主義、ルネッサンスの立場がある。

しかし、この復古主義は、古代復興ということにより、一種のルネッサンスであるにしても、それはあまりに野蠻なルネッサンスである。なぜなら、中世を占めたヨーロッパは、古代ギリシア、ローマというすばらしい文明を過去に見出すことができたが、聖徳太子以来の、仏教によって影響を受けた日本の文化を、中世的といって否定した国々が嫌々くも古代なるものは、まことに未開の文化というものが何もない、人間の原始状態にはかならなかったからである。それゆえに宣長の復古主義は、一種の野蠻主義になるのである。

野蠻を理想にしてわが国を忌だ。ここに私は、日本の国学的ナショナリズムの巨大な文化的悪行を見るのである。われわれはそういう文化的悪行を、愛国の名をもつて行なっているのである。

それゆえ宣長は、儒仏の影響をぬきにして、日本文化を見ようとする。漢心^{かんしん}をしりぞけて、大和心で、日本文化を見よ。それが宣長のモットーであるが、漢風^{かんぷう}こそ、はなから文化というものにたいする正しい理解力をもつて、彼は、日本文化にたいする美的には正しく解断を行なった。たとえば、彼は、師の眞氏^{まうじ}貞徳となつて、万葉集をもつともよい家集とはしなかつた。それはあまりに

甲 であり、われわれが真似ようとしても真似ができない。むしろ日本美の規範は新古今集、なかにすぐ藤原定家の歌に求むべきである。この点、彼は、師説に反して、がんにこの美的感受性を主張する。私は彼の美的感受性は正しかつたと思へ。歌道では藤原定家、小説では源氏物語、源氏物語と新古今集を中心にして、日本文化を考える彼の見方は鋭い。彼以前の国学者、彼以後の国学者も、こういう宣長の視点についてはほとんど正しく認識しようとしなない。この点われわれは宣長の洞察力をたふさぐ。

しかし、問題は、その解釈である。源氏物語も、新古今集をも、宣長は

乙 と見る。つまり彼は、それを「儒の文学作品」と見る。そしてこの文学作品が、道徳的価値、あるいは思想的価値と別な価値をもつものとききえる。これが有名な「源氏物語玉の小櫛」で展開される彼の文学論である。もののあわれを知るといふことが、物語の本質である。そしてそのもののあわれを知るとは、道徳的教訓とは、思想的知識ともまったく別である。われわれはここで、美を感情に關係せず、理性に關係する知識として、意志に關係する道徳とも区別したプラトンの美善の立場を思い起こすであらう。宣長の文学論は、カントの美善のように近代形である。

宣長は、こうして文学の価値を、道徳的あるいは思想的価値から独立させることによつて源氏物語を正しく解断しようとする。それは絶対に文学的な作品で、仏教の影響はない。同じ解断のしかたが新古今集についても行なわれる。

丙

しかし、私はこのヤイミンなる道徳の中に、一種のカラクリがひそんでゐることに注意しなくてはならない。美の価値が、真や善の価値からはつまり分かれるのは、ヨーロッパにおいても十八世紀であつた。日本においても、おそらく宣長の頃からであらう。それまでの芸術が、善や真と離す

のは、むりである。紫式部や、藤原定家は、Ⅱ 真や善の価値を離れた美の価値を単独に追求したのではない。むしろ、彼ら二人とも、仏教が人間の意思に大きな影響を及ぼした時代になんていて、二人とも熱心な仏教信者であった。

源氏物語を雄心なく読むがよい。登場人物のうち、作者によって同情をまわっている人物は、例外なく仏教に心を寄せる人物といつてよい。そういう人間は、おのれ自分の弱さを知っている。人間の罪や、業や、あるいははかなさも、彼等はよく知っている。そういう人間、一方で現世の^{カネヲウ}カネヲウにも、決して否定の眼を向けないが、どこか、人間を見る眼の中に、一種の傷や、悔みをもつ人間、そういう人間こそ、紫式部がものあわれを知るという人間なのだ。

私はこの小説は、式部の無きなる断念によつて書かれた小説であると思ふ。源氏物語五十四帖、そのうち十三帖が「光源れ給ひにし後」の物語である。つまり源氏物語は、源氏一生の物語ではないのである。一生の物語とすれば、「^{ハナミヤ}匂宮」以下の必要がないのである。「^{ハナミヤ}匂宮」以下をなぜつけ加えたか。私はこれは、紫式部がこの部分の主人公^{ミチノ}時舟を喜んだからではないかと思ふ。

もしも大胆なスライプが書かれるならば、光源氏の時代は、光の時代である。つまり、まだ、すばらしい、精神の力においても肉体の力においても、完全と思はれた人間が現存した時代なのである。ちやうどそれは仏教の用語を用いれば、一種の修^{シュ}法^{ホフ}の時代であるといえるかもしれない。すばらしい生命が、そこに光源氏という人間となつて現存していたのである。しかし、「光源れ給ひにし後」は、こういう人間はもはや現存しない。そして人間は互に分裂する。最高の精神性をそそぐえた^{ホウ}薫^{コン}と、最高の肉体性をそそぐえた^{ハナミヤ}匂宮。もはやここで、最高の精神性が、最高の肉体性と同居するわけにはいかな。完全なものが、もはやありえない分裂の時代、闇の時代である。いわば^{ミヤミヤ}未^ミ法^{ホフ}の時代なのである。

時舟の悲劇は、こういう分裂の悲劇なのである。つまり、最高の精神性をそそぐえた^{ホウ}薫^{コン}と、最高の肉体性をそそぐえた^{ハナミヤ}匂宮。二人の男性に彼女は、愛され、しかもこの二人の男性のどちらかを、彼女に選ぶことができないのである。彼女は薫の静かなやさしさを、心から好^{ヨウ}しく思うが、一方で、匂宮の強烈な魅力を忘れかけているのである。精神性をえらぶが、肉体性をえらぶが、結局、彼女はどちらを選べずに、死を選ぶ。闇の時代における完全主義者の弱點なのである。(中略)

私は、紫式部は、ここで、仏教の断念に徹した一人の女の非情な心なことを書いたのではないかと思ふ。闇の時代、まじの世景、そこに生まれた分裂の認識、そしてそういう闇の人生からのまごたま断念。それは^{ミチノ}時舟の救済するところであるが、むしろその^{ミチノ}時舟を説いた当の源氏より、悩める女時舟のほうが、Ⅲ 強い決心をもっているのではないか、私はかかるあわれな女のためにあるのではなくた^{ミチノ}時舟の、紫式部の語りたかったこのように私は思う。

まだ私は源氏物語について言いたいことは多いが、この物語をこのように見ると、^{ミチノ}時舟の源氏を仏教の影響なしに見ようとするところが、いんげんに通記であるかがわかるであらう。

(梅原猛「習字する心」)

問 1 傍線部 a、e のカタカナを漢字に直せ。カタカナの後に示した選択肢のうちから、最も適切なものを、それぞれ一つずつ選べ。ただし、a、e それぞれについて定まらなければ加点しない。解答番号は 25、34。

a ヒョウベイ

ヒョウ ① 錠 ② 病 ③ 拙 ④ 鋪 ⑤ 苗 ⑥ 廟 ⑦ 秒 ⑧ 屏 ⑨ 平

25

ベイ ① 啤 ② 陸 ③ 辨 ④ 略 ⑤ 弊 ⑥ 兵 ⑦ 丙 ⑧ 瓶 ⑨ 伴

26

b キョウリ

キョウ ① 郷 ② 胸 ③ 臨 ④ 経 ⑤ 教 ⑥ 享 ⑦ 凶 ⑧ 共 ⑨ 境

27

リ ① 理 ② 利 ③ 履 ④ 里 ⑤ 吏 ⑥ 梨 ⑦ 離 ⑧ 李 ⑨ 裏

28

c ゼイミン

ゼイ ① 正 ② 生 ③ 襲 ④ 嗣 ⑤ 精 ⑥ 成 ⑦ 誠 ⑧ 滑 ⑨ 性

29

ミン ① 蜜 ② 詰 ③ 満 ④ 尤 ⑤ 光 ⑥ 三 ⑦ 貢

30

d カンラク

カン ① 感 ② 監 ③ 漢 ④ 干 ⑤ 喚 ⑥ 歛 ⑦ 関 ⑧ 勧 ⑨ 勘

31

ラク ① 楽 ② 洛 ③ 落 ④ 酪 ⑤ 烙 ⑥ 略 ⑦ 絡

32

e スイテイ

スイ ① 粋 ② 推 ③ 水 ④ 垂 ⑤ 炊 ⑥ 維 ⑦ 逐 ⑧ 衰 ⑨ 翠

33

テイ ① 提 ② 訂 ③ 邸 ④ 低 ⑤ 底 ⑥ 定 ⑦ 帝 ⑧ 紐 ⑨ 体

34

問 2 空欄 I、III に入る語として最も適切なものを、次の①～⑧のうちから、それぞれ一つずつ選べ。ただし、同一番号は一度しか使えない。空欄 I の解答番号は 35、空欄 II の解答番号は 36、空欄 III の解答番号は 37。

- ① などえ ② とこで ③ はるかに ④ もし
⑤ その一方 ⑥ むしろ ⑦ なぜなら ⑧ けつして

問 3 空欄 甲 に入る語として最も適切なものを、次の①～⑥のうちから、一つ選べ。
解答番号は 38。

- ① 思想的 ② 中性的 ③ 素朴 ④ 道徳的 ⑤ 理想 ⑥ 不純

問 4 空欄 乙 に入る語句として最も適切なものを、次の①～⑥のうちから、一つ選べ。解答番号は 39。

- ① 道徳的価値をもつ
② 思想的価値をもつ
③ カントの思想に導くもの
④ 近代的思想に共通するもの
⑤ 儒教の教義ないもの
⑥ 文化的価値といえるもの

問 5 空欄 丙 に入る小見出しとして最も適切なものを、次の①～⑥のうちから、一つ選べ。解答番号は 40。

- ① 源氏物語の意義
② 国字における源氏物語
③ アートとしての源氏物語
④ 源氏物語に込められた
⑤ 源氏物語の国学的解釈
⑥ 源氏物語における精神

問6 傍線部A「われらは宣長の味方である」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は 41。

- ① 宣長が指摘する文化認識は、当時の学者が諸外国のことだけでなく自国についての知識を深めていないことであり、これは現代の学者にも当てはまるといえる。
- ② 現代の学者は新国学者と呼ばれており、その源泉には江戸時代の宣長と類似した思想があるので、必然的に宣長の思想を継承する立場になるといえる。
- ③ 宣長は、当時の知識人が神の道を廢かにし、外国の教に目を向けていたことに対して批判的であり、現代の学者も宣長と同じであるといえる。
- ④ 現代の学者が自国のことを外国のことよりも知らないうのは、宣長が当時の学者について指摘していることと一致しており、その点で宣長と同じ立場であるといえる。
- ⑤ 江戸時代の学者が自国のことを前代の学者よりも知らないうことを指摘したのは宣長であり、この指摘を現代の学者も踏襲しているといえる。

問7 傍線部B「一種の野蠻主義である」の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから、一つ選べ。解答番号は 42。

- ① 宣長が、熊弘の彫像をなまこして文学作品を捉え、現代に際する国粋主義の土壌を作ってしまったから。
- ② 宣長の考えた東国主義は、文化も何もない人間の原始状態としての古代に回帰することになるから。
- ③ 宣長が、国字の本質は仏教渡来以前の日本文化を明らかにし、神道を広めることにあると説いたから。
- ④ 宣長が、仏教渡来以前の日本文化に「アモト」の精神を見出し、そこにその精神がキョウの文化と比べて、「野蠻」であることを記述したから。
- ⑤ 江戸時代の人々は、文化がなく、人間の原始状態の世界であったために、日本文化の手本を求めていたから。

問 8 本文の内容と合致するものを、次の①～⑦のうちから、二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

43

・

44

。

- ① 私たち日本人は、日本の文化を西欧との関係で捉えようとしているが、国学の主張する愛国主義に影響を受けたことによって、西欧の文化を偏った知識で理解している。
- ② 宣長は神皇正統の宗教的儀式を知ることを通して日本の文化を考察しようとしていたため、西洋のものを日本に取り入れようとした日本人の努力に対しては考慮しなかった。
- ③ 古代日本の文化はアトに落ちているのに対して、中国・インドのような遠隔的文化にはもっともなる優りがあるという思想が、宣長の文章論の底流にある。
- ④ 宣長は、日本美の根本を万葉集を中心とした和歌集に求めたことで、日本文化に対する美的には正しい解釈を行なったと現在では考えられている。
- ⑤ 日本において、真や善の価値から美の価値へと価値は移行したのは、十八世紀頃からであり、源氏物語を宣長の独自の思想で解釈しようとしたことには無理がある。
- ⑥ 源氏物語になさる光と闇の部分は正法・修治思想を全致し、また儒教的な考えに基づいていることから、孝式説が持つ儒仏の知識は当時の価値以上と考えられる。
- ⑦ 源氏物語を中心として日本文化を考察しようとした宣長の洞察力は高く評価できると、文学的価値に限定された源氏物語の解釈については、まったく評価できない。